

岡武藤禎夫編
雅彦

嘶本大系

第五卷

東京堂出版刊

編者略歴

武藤禎夫 大正十五年、東京に生まれる。東京大学国史学科卒業。現在、朝日新聞社日本古典全書編集長。編著に『江戸小咄辞典』『落語三百題』『江戸小咄の比較研究』（東京堂出版）『中国笑話選』『昨日は今日の物語』（平凡社東洋文庫）『日本小咄集成』（筑摩書房）など。

岡雅彦 昭和十五年、北海道に生まれる。昭和四十年北海道大学大学院文学研究科修士課程終了。昭和四十三年フェリス女学院大学講師。昭和四十八年国文学研究資料館助教授。著書に『近世文学資料類従・九、案内者・世諺問答』（勉誠社）など。



嚙本大系 第五巻

定価は箱に表示
してあります

昭和五〇年二月一日 初版印刷
昭和五〇年二月二五日 初版発行

編者 武藤 禎夫
岡 雅彦

発行者 岩出 貞夫

印刷所 理想社印刷所

製本所 協和製本株式会社

発行所 株式会社 東京堂出版

東京都千代田区神田錦町三十五(一〇〇)
電話 東京 三二八三六 振替 東京 二七

凡 例

本大系は主として江戸時代前期（明和年間まで）の所謂軽口本の代表的な作品を収録するものであるが、初期のものとしては、狂歌咄風の作品も収録した。

翻刻にあたっては、底本の忠実な活字化につとめると同時に、読み易いものとするように努力した。その方針は概ね次の通りである。

- 1 本文の行移り・丁移りは底本に従わなかった。ただし、底本の各丁の終りに当る所に、版心の丁付により丁数を括弧内に漢数字で示した。例えば一丁の表と裏は（一オ）、（一ウ）で示し、挿絵がつづく場合は（二ウ）（二オ挿絵）、（二オ）（二ウ・三オ挿絵）などとした。底本に丁付を欠くときは洋数字で実丁数を記した。
- 2 句読点は底本にとられず、私見によって句読点・並列点を施した。
- 3 小文字の割り書等は意味のある場合にのみ再現し、咄の末尾の評語も本文と区別するために小文字にした場合もある。歌句は改行して理解の便を図った。
- 4 仮名。

イ 仮名の字体は現行の平仮名・片仮名に統一した。ただし、当時平仮名の意識で使用されていた「ミ」「ハ」「ニ」は読み易さを考え、そのまま残した。

ロ 特殊な合字・連字は現行の字体に改めた。（例、コ↓コト、メ↓ンテ、カ↓より、五↓さま）

ハ 仮名遣は混乱しているが、底本通りとして、歴史的仮名遣には改めなかった。

ニ 本文の清濁は、底本では当然濁点のあるべき所に、ない場合が多いが、私に加えることはせず、底本通りとした。ただし、濁点の位置のずれは正した。(例、おとがし↓おどかし)

ホ 誤字・誤記と思われる仮名も改めず、行間に(ママ)と注記するか、或は正しいと思われるものを()で囲んで示すかした。

ヘ 衍字と考えられるものも削らず、(ママ)(衍)の注記をした。

ト 振り仮名も底本通りとし、削除したり補ったりはしなかった。「限り」^{かぎり}などの衍字もそのままとした。ただし、位置のずれは正した。(例、奈良↓奈良)

5 漢字。

イ 字体は原則として新字体を用い、新字体のないものは通行の旧字体を用いた。ただし、固有名詞などで底本のままにした場合がある。

ロ 異字体はできる限り、新字体或は通行の旧字体に改めた(例、恠↓恠、恠↓恠、恠↓秋)。しかし、該当する字のない場合(例、姚、泪、姫)は、そのまま残した。

ハ 宛字及び通行の久しい慣用文字は注記せずに残した(例、百姓→百姓、陳所→陣所、有時→或時)。ただし、極端なものは(ママ)の注記或は正しい字を()内に示した。

ニ 特殊な草体・略体は通行の文字に改めた。(例、ひ↓候、ミ↓也、ヒ↓被、ち↓給、ア↓部、井↓菩薩、厂↓鴈、广↓磨)

ホ 誤字・誤刻はそのままとし、注記を施した。

- 6 反復記号は底本にしたがい、「ム」「ミ」「メ」「フ」の四種を使用した。
- 7 挿画はすべて収録した。その位置は該当する咄の中か、近い場所に挿入した。後人のいたづらがきなどは消したが、他は修整しなかった。
- 8 校訂者の注は最少限にとどめ、行間に（ ）を以って示した。
- 9 虫損・汚損等による難読箇所は、他の同一版本で校訂した場合は特に注記はしないが、異版等でその文字を推定しうる場合には、（○○カ）と注記した。校訂出来なかったものは、空白のままとした。
- 10 謡の詞章に付したゴマ点や話の番号の罫みなどは削除した。文中に記された特殊な図柄は凸版で示した。
- 11 題名のない場合、検索の便を考え、各話の冒頭に、それぞれ通し番号を洋数字で付した。
- 12 諸本や後刷本との話の異同出入などで特記を要するものは、補遺の形で、該書の末尾または解題中に付加したことがある。

底本に用いた原本は、容易に閲覧できる利便を考慮して、公共の図書館・文庫や大学の研究室・図書館所蔵のものを主として使用したが、一部は架蔵本に依った。出来る限り初版完本を心がけたが、元版を求め得ず、その板木を用いた改題後刷本の方を紹介したものもある。また一部を欠いて不完全のため、他蔵書と合わせて揃えたものもある。その場合には注記を施した。

各巻末には、所収書の解題を付した。ここでは簡単な書誌と、諸本や後刷本との関係や異同等に触れた。第一冊～第四冊を岡が、第五冊～第八冊は武藤が、主として担当した。

底本の所在は一々記したが、公刊を許可された図書館・研究室は次の通りである。記して謝意を表する。

東北大学図書館・水戸彰考館・国立国会図書館・都立中央図書館・宮内庁書陵部・東洋文庫・東京大学図書館
・同霞亨文庫・同国語研究室・早稲田大学図書館・学習院大学図書館・大東急記念文庫・刈谷市立図書館・蓬
左文庫・京都大学文学部図書室・大阪府立図書館・天理図書館・広島市立中央図書館

目次

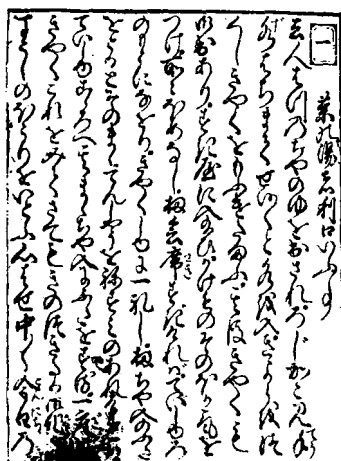
凡例一

宇喜藏主古今咄揃(延宝六年刊).....	三
当世軽口咄揃(延宝七年刊).....	四
軽口大わらひ(延宝八年刊).....	七
当世手打笑(延宝九年刊).....	二六
当世口まね笑(延宝九年序).....	二五
鹿野武左衛門口伝はなし(天和三年刊).....	一八〇
鹿の巻筆(貞享三年刊).....	二〇一
正直咄大鑑(貞享四年刊).....	二四二
当世はなしの本(貞享頃刊).....	二六三
所収書目解題.....	二九一

嘶 本 大 系

第五卷

宇喜蔵主古今咄揃



宇喜蔵主古今噺揃序

何れのとときにかありけん、瓢箪寺の住侶宇喜蔵主と申せし
 ハ、一生浮世は飛鳥川、きのふの分別もけふハ人のあたと
 なり、夢幻泡影の世の中に、何もかもない本来の麵類ハ、
 唯喰なりと思ひ取、性空上人の味噌豆も、法然の釈にて是
 をもり、富士の人穴の勧進に日を暮し、あることないこと
 狂言綺語の道すがら、三仏乗のあんざ柿、下手（一オ）の噺
 も時いたれば、円月の窓の内に腹をかゝへ、観念の床に手
 をたゝき、たそあるかいやい太郎冠者、ねんのふはやし
 みじか夜も、ねむりをさます郭公、声立花の香をかげバ、む
 かしハまつこふあつたとの、はなしに骨を折句さへ、業平
 餅の教をわすれ、男なりけりやすら殿、首をみずしてちゝ
 くハいと、尾もない事を次第に、書集たる笑草、古今
 噺揃といふものならし。（一ウ）

延宝六年刊

作者不詳

中本五卷

早大図書館蔵（卷一〜三）

天理図書館蔵（卷四）

京大文学部図書室蔵（鹿の咄蔵）

宇喜藏主古今噺揃第一目録

- 一 茶の湯者の利口いふ事
ちや ゆしや りこう
- 二 元三に金銀え方参りの事
ぐへんざん きんぎんえ はうまい
- 三 誂諸師柳上公事の事
はいかいしりやうしやうくじ
- 四 田舎者伏見下り船の事
いなかものふしめい ふね
- 五 せりやきの事
かりや せりやき
- 六 高野坊主指物屋喧嘩の事
かうやばうず さしものやけんくわ
- 七 狼松尾え社参の事（二才）
おほかみ まのけい しやうまのし
- 八 因幡菜師諸病 威徳の事
いばな やくし しやうやうい
- 九 堺指物屋又五郎事
さかいさしものや またご ちやう
- 十 田舎者京内参りの事（二ウ）
いなかものきやううちまい

一 茶の湯者利口いふ事

去人、初の茶の湯を出され、炉路間、手水鉢まで、清々として水を入、きよらをつくし、客をもふけたまふ。其後、客も御出有。数寄屋に入給ひ、掛物其外氣を付、所々ほめなし、扱会席過けれハ、亭主、炉のもとになおり、客衆に一礼し、扱茶入の蓋をとると其まゝ、天井を鼠のあれけれハ、亭主こゝろへ、其まゝ茶入にふた（二才）をする。一座の客、是を見て、扱も氣の付たる御作意。すこしのほこりをいとふ



心ばせ、中／＼今日の茶の湯なとゝほめけれハ、亭主自慢しちうめんをつくり、しばしありてたてらるゝ。其後茶を茶碗へいるゝと、又天井を鼠のあれけれハ、亭主あはて赤面し、何とすべきたよりもなく、茶杓を脇へ打すて、鼻をつまんで、にやんといふた。(一ウ)(二オ挿絵)

二 元三に金銀え方参りの事

元三に、丁銀と沓歩とこま銀と三人つれたち、え方参りをした。丁銀かいふやうハ、互に旧冬はひまもなく、商売に

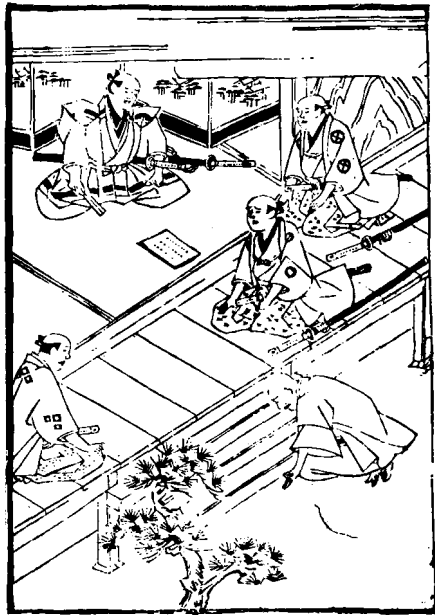


つかはれける。一夜あくれば、かやうに長閑になり、民の竈ハにぎはひ、君万歳の御代なれば、我／＼もゆたかに諸国をめぐり、諸人の宝となり、かく安楽にくらす事、目出度事なとかたりける。沓歩(二ウ)が聞て、もつとも其方の仰らるゝとをり、我／＼程世に重宝せらるゝ物ハ、又あるまひ。去ながら、面々の身の上には、ふしやうといふ物があるが、丁銀殿ばかり、身にふしやうハ有まい。あまり小家へも行たまはず、誰の封かれの包とて、さのミ人にもあはず、のつしりと暮さるゝ。果報の人じやといふた。丁銀、是を聞て、もつとも其方のたまふことく、あまり貧なる者の(三オ)手ハは渡らす、こまばたらきはせねども、爰にひとつのふしやうがある。先世間に大分の銀持がおほきによつて、某を松板の箱に入、土蔵に積重て置ときハ、息も自由にならぬ。これほど迷惑な事ハないといふた。沓歩か聞て、いかにも、左様のふしやうハあるものじや。某も世間にてハ、あるひハ遊山遊興にハ花の露のといふて、前巾着紫ふくさより出て、(三ウ)かどや／＼といふて重宝ハせらるれ共、世間に目の利たるものハすくなく、多分が目のきかぬものゝ手にわたれば、よひかわるひかと、たび

く歯にあてゝみる時に、何が口中のくさい歯にあつるによつて、其まゝ色がかはつて、じゆつなさ何にたとへられぬ。兎に角に、こま銀殿がましじやといふた。まめ板聞てされば某へ、節季物ぎには、貴賤上下のわかち（四才）もなく、心やすく人々の手に渡り、賞翫へしらるれども、又気のどくな事が有。あるひハ寺方、医師、物の師匠へ包まれて行ときハ、おほひかすくなひかと、度々手にてひねらるゝに迷惑するといふた。（四ウ）（五才挿絵）

三 誹諧師柳上公事の事

去国に、誹諧師柳上といふ者あり。すこしの庵をむすび、誹諧の善惡をものし居られたり。去上方衆、柳上に申さるゝハ、かゝる鄙にすまんより上方に登り、興行をしたまはゞ、身の幸となるべきと、千度百度いさめけれハ、柳上、ほとんど心打とけ、かの人と上方へのほり、誹諧をいたされしに、彼人、初の契約と相違し、柳上（五ウ）身の上ハすこしもかまはず、あまつさへ、後くはうとくなりけれハ、柳上、中く腹立し、身上のたよりとも成へきと申つゝ、かく是までつれ来り、かやうにるらうをささる事、死ても



わすれぬうらみなりとおもひ、いか様にも、国の守にうつたへ、身の理非をわかたんとおもひ、所のつかさへ、しかくのよし申上、すこしの賄もとりたきよし申ける。国の守きこしめしあげさせられ、若其（六才）証拠ばし有かと御尋有けれハ、柳上、いかにも証拠御座候とて、古き懐紙のミつ物を取出し、是御覽あそばされ候へとて、指上る。

発句

此池の柳上はなをしげりかな

うしろだてには山ほとゝぎす 柳上

一寸も跡へハさらぬ月さして

是はとなる証拠ハ御座なきとて、只をあかめ(六ウ)て申上る。国の守聞召、一入おかしくおほしめし、さあらハ、四句めを某つけん。是にて堪忍いたせとて、やがて御付なされける。

むしやうなものゝあつまりの秋

とあそばしけれハ、御近習衆、五句目を御付なされける。

葛袴露うちはらひたちませい

柳上、なにとも言葉なく、すこゝと婦りき。(七オ)(七ウ

挿絵)

四 田舎者伏見下り 船の事

去遠国の者、親子つれだち伏見の船にのり、大坂さして下りける。淀の御城をみて息子かいふやうハ、いかに親仁。此御城をたつるに、五百匁ほども銀か入事かといふた。親仁聞て、扱もく、汝はおろかな事をいふものかな。此御城をたつるに、拾貫目のかねが残るものかといふた。

親仁の異見聞事なり。(八オ)

五 芹焼の事

去人、芹やきを喰て、何と、此せりやきハ、火にあぶるものにてハなきに、芹煮とか煮芹とかいふべきものなるに、芹やきといふ事ハ、不思議なることじやといふた。かたゑなる人のいふやうハ、まだ芹ハ、鍋にて煮物じやさかいに、やくといふ縁も有が、まつさら火のけもないに、月代といふ事さへ有といふた。(八ウ)



六 高野坊主と指物屋喧嘩の事

高野坊主といふて、都方の門／＼に、札を出す出家有。去町の指物屋にゆき、例の札を出しけれハ、亭主、是を見て、中／＼札をうつ事無用。某ハ代々日蓮宗なれハ、他宗のちからハたのまぬと、おこがましくぞ申ける。坊主聞て、扱もけんどん愚痴なる人と、悪口しけれハ、亭主腹をたて、そこな糞虫、何といふぞと申ける。坊主聞て、中／＼（九才の事。三衣を着す沙門をハ、糞虫といふ事、もつての外ぜろごんの雑言也。此糞虫のいはれをきかんとぞ申ける。亭主聞て、何と、糞虫といふか腹が立はらたつか。其方は高野より出るといはぬか。それなれハ糞虫よと申ける。坊主閉口し、とかふの返答に及ばず。それなれハ、己ハ糞喰よと申ける。亭主聞て、厩々の指物屋を、糞喰と申ハ、いかなることぞ。此いはれをきかんとぞ申ける。坊主聞て、己ハ指物屋なれハ、箱してくらハぬか。それなれハ糞喰といふた。（九才）

（十才挿絵）

七 狼松尾へ社参の事



洛外に狼の出、田地をあらし、人を取けれハ、里人難義におもひ、松尾の明神へ湯を参らせ、狼の人をとらぬやうにと願をかけけり。明神の託宣に、此後ハ何事も有まじきと、狼を制しさせ給ひける。時に狼共、松尾へ参り、なげき申様、只今野山に、我々の食物御座なきゆへに、里に出て人を取申に、かやうに明神のとがめゆへ、人を取事も（十才）ならず、何とも食物に迷惑つかまつり候と申上る。明神聞召、汝等も不便の事也。其儀ならハ出家をとりて

ぶくせよ、出家ハ第一慈悲の者なれハ、うへたる虎に身を
あたへ、鳩のかはりに身をすつる。其ながれをくむものな
れハ、出家をとれとぞ仰ける。狼ども承り、こはかたし
けなしとて、御前をたち、扱里に出、出家をとらんと待
けり。折節、盆前の事なるに、法界の施餓鬼を申坊主、里
〔十一才〕くを通りける。狼、是をミテ願ふところの幸と、
やがて坊主に喰付けり。坊主きもをつぶし、鍔鉢をなげか
くる。狼、煎餅かとおもひ、頓而喰付けるが、かねのせん
べいはくはれぬとて、又坊主にとんでかゝる。坊主せんか
たなさに、懷より阿弥陀経をとり出し、狼になげかくる。
狼、是を見て、奉加帳かとおもひ、こそくにとにげた。

(十一ウ) (十二才挿絵)

八 因幡薬師諸病威徳の事

因幡薬師と申靈驗あらたなる薬師おはします。堂のまへに
為池の有けれハ、町中談合して住寺に申けるハ、かやうに
町の内に為池御座候て、往來の妨になり申候間、此堀を埋
み、町家を立たきよし申ける。住寺聞召、もつとも、町家
をたてたらハ、町内も賑ひ申べけれども、よく合点をした

宇喜藏主古今咄捕 (一)



まへ。薬師如来ハ、諸〔十二ウ〕病に薬をあたへなされ、人間
身の上の病をあはれまします仏なるに、薬師の面に疔が
出来たらハ、何とならふぞとおほせける。町人聞て、それ
ならハ、町といったして、いゝじゝをあげませふといふた。
(十三才) (十三ウ挿絵)

九 堺指物屋又五郎事

堺北の庄に、指物屋又五郎といふ者あり。一生文盲なる
者なるが、女房をむかへけるに、此女房、上方のものにて、